日本工業大学通信

発行所
日本工業大学
広報課
埼玉県南埼玉郡宮代町
郵便番号345
電話 0480(34)4111

入学祝

大学院工学研究科 博士課程（後期）を設置

今年三月、大学院工学研究科博士課程（後期）が、文部省当局との協議申請の結果、承認された。これにより修士課程二年間に加えて博士課程三年、計五年の大学院工学研究科が完成した。今回、承認されたのは機械工学専攻、建築学専攻の二専攻（定員は各二名）で、開設時期は四月一日である。

各専攻の概要は次の通り。

機械工学専攻

機械力学研究部門

機械工学の基礎分野として機械力学がある。特に最近の産業界で自動機械、知能ロボット等に大きな期待が寄せられているが、それらの技術革新の基軸の一つをなすものが機械力学であると考える。すなわち、個々の機械要素の運動を支配する力学を解明することにより、前述の自動機械、知能ロボット等の最も効率的な構築が可能になる。したがって、本研究部門では、研究テーマは出来るだけ基礎的なものとして、例えば要素としての平面運動体、回転体を主体とし、これらの基礎的なメカニックスの追求を行う。また、バイオメカニックスについても研究を進めて行く。

エネルギ・制御工学研究部門

エネルギシステム（エネルギのプロセッシングおよび伝送を司るシステム、動力伝達システムを含む）の制御をふまえて、システムの力学的挙動をシステムに構成するユニットの実体的設計、選択との関連において解明し、制御計画およびシステムの計画設計を合理的に行う方法に関する研究を行う。主要研究題目は高速風車および自然風エネルギ利用システムの研究、小型水車およびその制御の研究、ロボット動作の制御理論に関する基礎的研究、ロボットのフィールドバック制御と知的動作に関する基礎的研究等である。

熱工学研究部門

熱流体を作動媒体とするエネルギ変換技術の問題を特に研究する。主要研究題目は、種々のタービンの熱効率向上に関する基礎的研究等であり、熱エネルギの利用の効率化をテーマとして研究と教育の場を展開していきたい。

材料加工学研究部門

材料の加工という古くて新しいテーマについて、加工の自動化、新材料への適応という観点から研究を行う。すなわち材料の溶融現象を利用した、溶接、鋳造加工等の溶融工学の分野並びに材料の非溶融状態における切削加工、研削加工、塑性加工等の変形工学の分野についての研究を行う。主要研究題目は溶接自動化のために不可欠な溶接現象のモデル化による解明を行う基礎的研究、新材料複合材料の変形能と塑性加工の適用性について、実験及び上界法の如き理論的アプローチの両面から解明する研究、同材料を加工する際の工具と材料界面におけるトライボロジー等が挙げられる。

建築学専攻

建築構造学研究部門Ⅰ

建築構造において、現在の主流である鋼構造、および鉄筋コンクリート構造で、目下最大の課題は耐震安全性にある。本部門はこの観点に立って、世界各地に頻発している大地震の震害調査から得た新しい知見に基づき、益々大規模化、高層化が進む建築構造での破壊機構の解明、それに対する地盤挙動の解析、高強度材料の開発について考究する。すなわち、これら構造物の耐震要素、接合部の繰り返し高速荷重時の挙動、鋼材とコンクリートの適切な共同性の解明につとめ、構造物の耐震安全性の確保に資そうとする。

建築構造学研究部門Ⅱ

建築設計および建築構造の基本である各種材料を、その物性からのみでなく、建築物の各部位に組みこまれた場合の複合体として具備すべき諸条件を研究し、その要因を耐用性能、機能的性能および人間に対する感覚的・環境的性能において、考究する。特に、感覚的性能は現在その重要性にもかかわらず最もなおざりにされており、緊急な対策を求められている分野である。これの研究・教育に当たっては、推計学による実験の計画と実施、官能検査による建築構法の人間の生理、心理に与える影響等について実験研究を進める。一方、地盤の挙動と建物の耐用性の関連について考究する。

建築計画学研究部門Ⅰ

建築と自然環境のかかわりを軸に、自然生態系に立脚した建築環境論、気象の観点からの物理環境論を展開し、それらの知識を基盤にした空気環境の特性を考究する。次に、自然環境の応用としての建築設備、特に、先端技術の一つであるIC、LSIにおけるクリーンルーム、さらにすすめて現在国際的に問題になっているバイオロジーの分野における工学技術手法の適用を研究しようとする。さらに、エネルギーを軸とする都市施設に着目し、エネルギー供給プラント、地域冷暖房など将来の都市計画に不可欠の課題を考究する。次いで、これらの技術を個々の住宅に生かし、住居の質的向上について考究する。

建築計画学研究部門Ⅱ

民族の持つ文化は、それぞれの土地に密着した人間の営為により歴史的に蓄積されたものである。しかし、現代の工業化、情報化の急激な進展は、この文化を画一化均質化を企図しており、歴史や風土との断絶によって人類の文化の衰退を招く恐れ無きとしない。本部門はこの観点に立って、文化における建築の持つ役割の認識を考究し、意匠や空間の質的内容はもちろん、地域を建築の集合としてとらえ、その計画についても考究する。さらに、民族の遺産である古建築の調査を行い、すでに実施したネパール王宮の調査の経験を生かして国内はもちろん、国外においても実地調査を行う。

柳沢助教授に工学博士授与

機械工学科の柳沢章助教授に、三月十九日付で、東京大学から、工学博士の学位が授与された。

論文名は「金属短繊維混入複合材料とその応用に関する研究」で、その研究成果の一部に対して、昨年、素形材産業技術賞（財素形材センター）が贈られた。

21回目の入学式挙行

去る四月四日、本学体育館において、二十一回目の入学式が挙行された。学園創立八十周年を迎える、記念すべき年に入学した学生数は九一四人である。

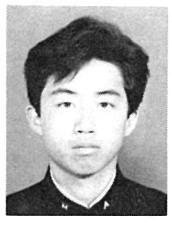
4月4日の入学式

62年度 出身高校別入学者数

【北海道】帯広工2 釧路工5 美唄工1 苫小牧工1 室蘭工1 小樽工1 旭川実業1 函館工1【青森】青森工1 弘前工4 十和田工2 むつ工1 南部工1 野辺地工1【岩手】大船渡工2 黒沢尻工2 宮古工1 一関工1 釜石工3 盛岡工2 水沢1 花巻東1【宮城】古川工1 白石工1 市立仙台工2【秋田】男鹿工3 能代工5 秋田工3 横手工1 大館工1【山形】鶴岡工3 山形工4 東根工2 米沢工4 新庄工2 酒田工1【福島】福島工4 勿来工3 平工6 小高工2 郡山北工2 塙工1 喜多方工3 会津工6 白河実業1 二本松工1【茨城】総和工5 水戸工8 勝田工6 高萩工2 日立工4 土浦工11 下館工8 玉造工1 波崎3 大宮工2【群馬】太田工11 藤岡工4 高崎工7 前橋工7 伊勢崎工8 桐生工4 長野原2 渋川市立工2【栃木】足利工7 真岡工3 宇都宮工12 今市工2 栃木工8 作新学院3【埼玉】筑波大坂戸2 狭山工6 行田工8 久喜工9 浦和工7 秩父農工6 川越工13 玉川工4 春日部工17 川口工10 大宮工11 与野農工1 新座総合技術2 熊谷工14 越生1【千葉】千葉工6 茂原工1 市川工8 京葉工1 東総工7 清水6 館山1 千葉工商2【東京】足立工3 王子工5 本所工3 江東工3 杉並工1 葛西工6 小金井工7 練馬工2 向島工3 烏山工2 荒川工6 田無工3 墨田工2 工芸1 蔵前工2 港工1 世田谷工1 羽田工1 町田工1 目黒1 砧工1 本郷3 豊島実業2 安田学園9 昭和一工5 関東第一4 足立1 淵江1 芝浦工大高1【神奈川】川崎工2 神奈川工5 向の岡工4 藤沢工3 相模台工2 鶴見工2 磯子工3【山梨】谷村工1 甲府工6 北富士工6 韮崎工6 機山工5 峡南4【長野】岩村田6 駒ヶ根工3 上田千曲8 箕輪工3 池田工4 松本工2 岡谷工3 中野実業1 飯田工2 飯田長姫2 長野工9 蘇南1【新潟】直江津工4 三条工1 新発田南6 高田工5 新潟東工3 長岡工3 中条工1 新津工2 燕工5 柏崎工6 新潟工7 巻工3【静岡】浜松城北工8 島田工3 引佐2 沼津工3 清水工1 吉原工3 掛川工2 静岡工3 修善寺工6 天龍林業1 静清工2 浜松工2【愛知】豊橋工4 東山工1 一宮工1 半田工1 春日井工1 小牧工1【岐阜】大垣工1 可児工2 岐南工1 関商工1 岐阜工3 高山工2 多治見工1【富山】富山工3 大沢野工2【石川】羽咋工3 金沢市立工3【福井】敦賀工1 科学技術2【滋賀】彦根工1【京都】宮津2 洛陽工1 石原1 峰山1【三重】伊勢工2 津工3【和歌山】和歌山工1 新宮1【奈良】吉野2【大阪】西野田工1 堺市立工2 今宮工1 太成1 浪速工2【兵庫】尼崎工3 龍野実業1 兵庫工1 篠山産業1 豊岡実業3 尼崎産業1【岡山】岡山工1 水島工2 津山工4 玉野光南1 備前1 高梁工1 新見北1 関西1【広島】呉港2 宮島工1 三次工1 広島市立工1 尾道1 呉工1 三原工1【山口】岩国工2 南陽工1 下関工2 小野田工1【鳥取】境港工5 米子工2 鳥取工2 鳥取西工3【島根】松江工2【徳島】貞光工1 徳島工1【愛媛】松山工1 新居浜工4 八幡浜工1 今治工1 吉田3【高知】高知工1【福岡】福岡工2 戸畑工1 筑豊工1【佐賀】鳥栖工2 塩田工1【長崎】上五島1 鹿町工1【熊本】熊本工1 熊本マリスト学園1【大分】大分工3【宮崎】延岡工1【鹿児島】鹿児島工1 出水工1 大島工1 加治木工1 有明1【沖縄】北部工1 沖縄工5 美里工4 浦添工1

特別奨学生の紹介

▽機械工学科



町田好隆（千葉県立東総工）

小林幹世（栃木県立足利工）

赤沼千尋（長野県立岡谷工）

船崎一男（新潟県立新発田南）

▽電気電子工学科

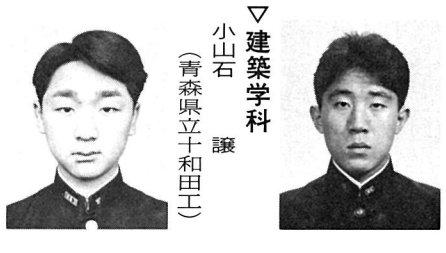
重野博（埼玉県立川口工）

齋藤英樹（新潟県立巻工）

伊藤昌博（東京工）

高瀬浩史（埼玉県立久喜工）

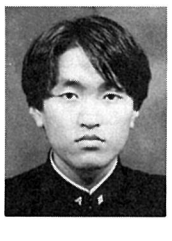
▽建築学科



小山石譲（青森県立十和田工）

鈴木信行（茨城県立土浦工）

▽システム工学科



森泉広行（長野県立岩村田）

人事異動

任用（四月一日付）

▽教養科　教授
高橋礒一（たかはし・けんいち）
大正十二年四月十一日生。昭和二十一年九月、東北大学理学部数学科卒業。前東京農工大学工学部教授。理学博士（東京大学）。

▽教養科　客員教授
今井忠一（いまい・ちゅういち）
大正十年十一月一日生。昭和二十二年三月、東京帝国大学理学部数学科卒業。前順天堂大学教授。

▽建築学科　客員教授
早川一也（はやかわ・いちや）
大正十四年十一月十一日生。昭和三十六年一月、カルフォルニア大学環境工学博士課程修了。前東京工業大学教授。Ph. D.（カルフォルニア大学）。

▽工業教育研究所　教授
関口修（せきぐち・おさむ）
大正十四年十一月十六日生。昭和二十七年三月、日本大学旧制工学部電気工学科卒業。文部省初等中等教育局職業教育課教科調査官、同教育助成局視学官等を歴任。

▽情報技術センター　助教授
中村洋一（なかむら・よういち）
昭和十七年二月二十二日生。昭和四十六年三月、東京都立大学理学研究科大学院物理学専攻博士課程単位取得退学。前日立製作所半導体事業部プロセス技術開発部勤務。理学博士（東京都立大学）

▽総務部庶務課　天元山荘管理人
遠藤竹美（えんどう・たけみ）

昇任（四月一日付）

▽機械工学科　教授
玉木保（たまき・たもつ）
昭和十六年七月二十六日生。昭和四十五年三月、東北大学大学院工学研究科機械工学第二専攻博士課程単位修得退学。同年四月、本学機械工学科講師。五十四年十一月、同学科助教授。工学博士（東京工業大学）。医学部整形外科分野における力学的問題の解明に力を注いでいる。

▽機械工学科　教授
村川正夫（むらかわ・まさお）
昭和十八年三月三日生。昭和五十二年三月、東京大学大学院工学系研究科博士課程（精密機械工学専攻）修了・工学博士（東京大学）。五十四年四月、本学機械工学科講師。五十六年四月、同学科助教授。塑性加工とレーザ加工に関する研究を進めている。

▽教養科　講師
中島克典（なかしま・かつのり）
昭和三十年三月二十一日生。昭和五十四年三月、日本体育大学専攻科修了。五十五年四月、本学教養科助手。バレーボールの運動学的な分析を研究の中心テーマとしている。

▽機械工学科　講師
渡辺高幸（わたなべ・たかゆき）
昭和二十二年四月十三日生。昭和四十五年三月、東京電機大学機械工学科卒業。四十五年四月、本学機械工学科助手。流量・流速計測やガスタービンに関する研究を主な研究テーマとしている。

▽建築技術センター　講師
川村清志（かわむら・せいし）
昭和四十九年三月、関東学院大学建設工学科卒業。五十五年四月から五十九年三月まで東京工業大学工学部建築学科研究生。五十九年四月、本学建築技術センター助手。建築材料・構法に関する研究を進めている。

異動・配置換（四月一日付）

▽沖口侃・電気実験センター教育技術員（前電気工学科技術職員）

退職

（一月三十一日付）
▽遠藤実総務部庶務課　天元山荘管理人

（三月三十一日付）
▽斉藤亨教養科教授（定年）
▽浅井正二工業技術史研究棟（定年、四月一日付嘱託）
▽秋山正夫総務部庶務課職員（定年、四月一日付嘱託）
▽竹内明総務部庶務課職員（定年）
▽岡野修一工業教育研究所研究員
▽西田英郎教養科助教授
▽宮井正弥システム工学科助教授
▽遠藤とみえ総務部庶務課天元山荘管理人

学校法人　東工学園

創立80周年記念行事

○学校法人東工学園記念式典
6月29日（月）帝国ホテル

○ミニＳＬ国際フェスティバル
（於）日本工業大学キャンパス
9月23日（水）～9月27日（日）

○大学公開（工業高校教員招待）
9月26日（土）

○日本実用英語学会年次大会
（於）日本工業大学
9月26日（土）～9月27日（日）

○日本工業大学大学祭
一般公開……11月1日（日）～11月3日（火）

○東京工業高等学校・東工学園中学校東工祭
一般公開……10月24日（土）～10月26日（月）

文化団体連合会　体育会　所属団体一覧

文化団体連合会

クラブ名	顧問	学生責任者
ハンググライダー部	小倉　勝助教授	柴木　博（機・3）
無線部	中道　一郎教授	野村　義幸（電・3）
ＢＪＰフルバンドジャズサークル	新妻　弘助教授	飯島　行雄（電・4）
モダンフォークソングクラブ	伊藤　庸一助教授	三澤　広幸（電・3）
写真部	堀田　勝喜助教授	石井　教之（機・3）
自動車部	小倉　勝助教授	金子　慎一郎（機・4）
第三文明研究会	松田　郁夫教授	宮下　貴幸（シ・3）
ユースホステルクラブ	高橋　篤夫教授	長谷川　一明（機・3）
美術部	杉本　安次郎教授	浅賀　敏夫（機・3）
新建築デザイン研究会	宮坂　修吉教授	佐藤　健治（建・3）
自然愛好会	桒野　愈士講師	小西　孝洋（機・3）
芸能研究倶楽部	伊藤　隆教授	宇田川誠一郎（電・3）
ロックフィール部	玉木　保教授	佐藤　孝哉（建・3）
マイクロコンピュータ研究会	片山　滋友講師	柴崎　正行（シ・3）
放送研究部	片山　滋友講師	小川　勲（機・3）
鉄道研究同好会	岩瀬　勝教授	石井　清之（機・2）
漫画研究同好会	川副　富男教授	武藤　明彦（電・3）

体育会

クラブ名	顧問	学生責任者
アーチェリー部	高橋　篤夫教授	獅子倉　欣治（建・4）
アメリカンフットボール部	酒井　誠助教授	篠田　浩幸（建・4）
ウエイトリフティング部	松木　繁教授	大槻　哲雄（機・3）
応援団	窪田　英毅助教授	小林　良安（シ・4）
空手道部	竹内　淳彦教授	大津　孝行（建・4）
弓道部	有賀　幸則講師	山内　雅年（機・4）
剣道部	雉波　恒夫助教授	中村　博志（機・4）
硬式庭球部	鈴木　一良助教授	清水　徹也（建・4）
硬式野球部	柳沢　章助教授	曽根　浩一（建・4）
ゴルフ部	長田　重慶教授	安田　謙二（建・4）
サッカー部	城戸　卓男講師	岩瀬　敏郎（機・4）
射撃部	高橋　琢二教授	鈴木　光明（機・3）
柔道部	大川　陽康教授	牧野　光明（機・4）
少林寺拳法部	大久保　勝弘教授	吉岡　正信（建・4）
スキー部	酒井　茂紀助教授	木村　峰朋（機・4）
体操競技部	小林　勉教授	清水　深（建・4）
卓球部	轡田　昇教授	笹辺　修司（シ・4）
軟式庭球部	岡本　鐳輔教授	河村　泰伸（建・4）
日本拳法部	石崎　敬三教授	岩城　和仁（電・4）
バスケットボール部	鈴木　寛次助教授	酒井　敏行（シ・4）
羽球部	杉本　安次郎教授	阿部　倫三（機・4）
排球部	中島　克典講師	藤島　正志（電・4）
ハンドボール部	伏見　恒夫講師	松本　光弘（建・4）
ボディビル部	中道　一郎教授	林　茂（機・4）
ヨット部	宮坂　修吉教授	藤本　学（電・3）
ラグビー部	塚林　功助教授	秋葉　朋幸（電・4）
陸上競技部	桑原　文夫助教授	園田　和道（電・4）
ワンダーフォーゲル部	川副　富男教授	横田　宏志（建・3）

在学生から新入生へのメッセージ

大人としての自覚をもて

機械工学科二年　橋口　誠

入学おめでとう。今、新入生諸君は期待と不安を抱いて学生生活を送っていることと思います。ちょうど一年前の私も同じ心境でした。しかし、すぐに学生生活にも慣れますので、あまり心配しないようにしてください。私の場合、高校は自宅から10分位で通学できましたが、大学は自宅から一時間半もかかるので、朝早く起きなければなりませんでした。このように生活の変化、環境の変化がありますので、まず、健康に留意してください。また、大学生活は高校生活と違い、自由な時間が多くなります。例えば、高校時代には、深夜にいたるまで遊んでいると、先生や両親から注意されますが、大学生ともなれば、注意されません。それは君たちが〝大人〟として扱われるからです。したがって、夜ふかしをして朝早く起きられず、授業に出なくても誰も注意をしてくれません。やはり、自分の生活は自分できちんと管理しなければなりません。最近、私の友人が交通事故で、けがをしました。聞くところによると、本学の学生の交通事故は非常に多いそうです。せっかく入学したのに交通事故で、けがをしたり、死んだのではなにもなりません。バイクや車の運転には、くれぐれも注意をしてください。

私の出身高校から本学に入ったのは四人でした。うち三人は電気電子工学科でしたので、機械工学科は私一人で、入学当初は友達がいなかったのですが、最初は私の学籍番号の前後の人と友達となり、次第に友達が増えました。勉強の方は、レポートを提出期限にきちんと出すなど基本的なことをやっておけば大丈夫です。実験・製図・英語などの必修科目は絶対に落とさないようにしてください。落とすと進級できなくなります。

昨年、私は本学のカナダ短期留学（語学研修）に参加し、海外での貴重な生活体験をしました。君たちもぜひ参加し、国際的視野を広めてください。

（埼玉県立新座総合技術高校出身）

何かに熱中する学生であれ

電気電子工学科三年　野村義幸

入学おめでとう。私は三年生になったばかりで、いわば、学生生活のお皿の上に、どのようなメニューが並ぶか。それが豊かなものになるのか貧しいものになるのかは新入生諸君の努力次第です。

夏休みや冬休みの長期休暇の過ごし方にも工夫をしてみてください。私は長期休暇中に小さな工場でアルバイトをやりましたが、納期を守るなど会社の厳しさを身をもって体験しました。本学には学外施設として、天元山荘、下田寮、赤倉寮があり、夏は海水浴、冬はスキーが楽しめます。低料金で、管理人は親切で、おいしい料理が出ます。これらの施設を大いに利用し、エンジョイしてください。

学生生活は自由な時間が多いですが、何かをやること、何かに熱中することが大切だと思います。クラブ活動や遊びに熱中できない人は勉強にも熱中できない人だと思います。最後に、新入生の学生生活での活躍を祈ります。

（群馬県立太田工業高校出身）

よく学びよく遊べ

建築学科四年　法貴慶人

入学おめでとう。新入生諸君は、登校の初日、大きな希望に胸をふくらませて日本工大の門をくぐったことでしょう。私も三年前は諸君と同じ新入生でしたが、思い出したくないことがあります。それをあえて告白しますと、恥ずかしいことですが、入学当初詐欺にあい、とんだ災難を受けました。単なる押売りではなく、情をからめた巧妙な手口に、まんまとのってしまいました。特に新入生はひっかかりやすいので用心してください。

私は入学後、野球部に入り、今日に至っておりますが、わが野球部は昨年、東京新大学野球秋季リーグ戦第二部で優勝、入替戦において一部昇格を果たしました。現在、春季リーグ戦の最中です。私が野球部で得たことはたくさんありますが、その一つが友人です。練習や試合で喜びや苦しみを分ちあっているので、互に心をわって話ができます。やはり、新入生には自分の好きなクラブに入ることをお勧めします。クラブに入っていれば大学に顔を出すことになり、大学に顔を出すことは授業に出ることにもなります。授業にまじめに出ることは単位が取得できるということです。授業に出ないで、単位を取るというのは虫がいい話で、楽して単位は取れません。私は三年までに必要単位数は取得しましたので、後は卒業計画に力を注ぐだけです。授業にはまじめに出てください。

しかし、勉強だけが学生生活ではありません。大いに遊んでください。私も友人と冬はスキーに、夏は海に出掛けました。また、リゾート地でのアルバイトも数多くやりました。よく学び、よく遊べが私のモットーです。新入生諸君の学生生活が実りあるものとなるよう祈っています。

（京都市立伏見工業高校出身）

一年生の時こそがんばれ

システム工学科四年　関口義秀

入学おめでとう。今、私はパーソナルコンピュータを用いたMBE装置の自動化というテーマで、卒業研究を始めたところです。新入生諸君も三年後には卒業研究をやることになりますが、それまでに、基礎的な勉強はもちろん、さまざまな体験をしておいてください。

学生生活をスタートするにあたっては、まず、学生便覧をよく読むことです。そして、わからないところがあったら自分一人で悩まずに教務課や学生課などの窓口で教えてもらうことです。私の場合は、幸いに同じ下宿にシステム工学科の先輩がいましたので、勉強や学生生活のことについていろいろと教えてもらいました。

何事にもルールがあるように、学生生活を送るうえにもルールがあります。たとえば、履修申告やレポート提出の期限は守らなければなりません。また、これから始まる長い学生生活の間には、風邪をひくなど、体調をくずすことがあると思いますが、そういう時は保健体育センターへ相談に行ってください。その他、大学付属施設として、図書館があります。専門書などがたくさんありますので、レポートを書く場合や新聞を読みたい時に、私もよく利用しています。

楽あれば苦あり、苦あれば楽ありと申しますが、一～二年の時、特に一年生の時に、しっかりと勉強をして出来るだけ単位を修得してください。そうすれば、三～四年生になった時に楽になります。特に、四年生になってからの卒業研究や就職活動に余裕をもってのぞむことができます。

本学の学生は全国の地方出身者です。それぞれの地方出身者と友達になり、友情をはぐくんでください。

（福島県立塙工業高校出身）

'88学生募集要項

工学部　募集人員

機械工学科（２００）　電気電子工学科（２００）　建築学科（２００）　システム工学科（１２０）

	特別奨学生入学	推薦入学	一般入学
出願期間	９月16日～９月30日	11月２日～11月14日	１月11日～２月12日
試験日	10月14日（面接）		２月15日（筆答）・16日（面接）
合格発表	10月20日	11月21日	２月23日
入学手続		第１回目　12月10日まで 第２回目　１月30日まで	２月29日まで
選考方法	第１次審査　書類審査 第２次審査　面　接		調査書、筆答・面接による総合審査 筆答科目　英語・数学・志願学科に関する工業科目
出願資格	高等学校を卒業見込みの者で、次のいずれかに該当する者。 １．学業成績が特に優秀で、身体、思想ともに健全であり向学心堅固な者。 ２．学業成績が優秀で、特に優れた特長・特技を有し、本学においてその伸展が期待できる者。 ３．学業成績が良好であり、かつ全国高等学校選手権大会等において入賞の経験を有し、本学においてその伸展が期待できる者。	本学が指定する工業高校（高校の工業科）の現役で、成績概評がＢ以上の者。志願学科と同系統の工業科を履修していること。 （システム工学科を志願する場合はこの限りではない。） （注）出願書類等は高校の進路指導室へ送付されます。	試験場　本　学

大学院工学研究科募集人員

修士課程

機械工学専攻（８）　電気工学専攻（８）　建築学専攻（８）

	推薦入学	一般入学（一次募集）	一般入学（二次募集）
出願期間	９月10日～９月19日	９月21日～10月３日	２月22日～３月３日
試験日		10月８・９日	３月８・９日
合格発表	９月28日	10月17日	３月12日

博士課程（後期）

機械工学専攻（２）　建築学専攻（２）

	推薦入学	一般入学
出願期間	９月10日～９月19日	９月21日～10月３日
試験日		10月８・９日
合格発表	９月28日	10月17日

工業技術博物館展示室完工

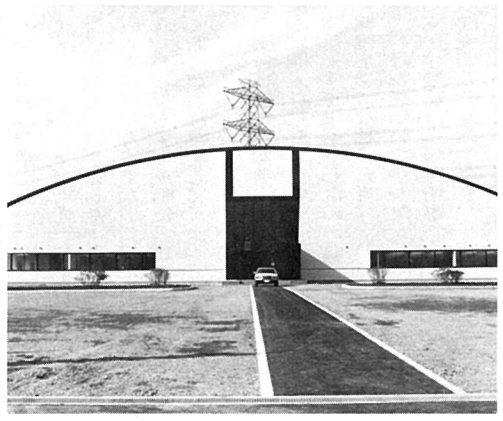
機械類の移転ほぼ終了

鈴木　昭

約六ヶ月の工期を要した工業技術博物館展示室（第一期工事）は昨年十二月二十三日に㈱巴組鐵工所より大学側に正式に引渡された。

この新展示館は大学の正門を入り、右手をみると、その前方に正面玄関（東）がみえる。

建物幅五〇米、白とこげ茶の二色の体育館を想わせる。筆者には瀟洒な感じの建物である。



工業技術博物館展示室の正面

正面玄関を入ると左手に受付を兼ねた研究室兼職員事務室、その隣りが応接室、そしてその隣りが男女の洗面所が配置されている。

また、右手にはまず書庫が、そして、その隣りが収容人員最大五〇名の講議室（アコーデオンカーテンによって二分も可）が配置されている。

展示館内は無柱で、床面は厚さ四〇糎の鉄筋コンクリートで仕上げられており、また、南北の窓側から約九米間隔で電動力線などを埋設する巾〇・三米の蓋付きのピットが、六本掘られている。

館内は最大二〇屯のクレーン車が自由自在に走行できる。

正面玄関の正反対側（西）には高さ六米、巾七・二米のシャッター扉があり、展示館内への機械類の搬入はここよりおこなっている。

南北に位置する窓側はその長さ六十米である。

窓ガラスが素通しであるのでブラインドを取付けるべく現在作業を進めている。

本年の一月に入ってから準備室内の収集機械類をベースに館内の展示レイアウトの検討を始め、三月中旬頃その概要がまとまったので、三月十八日より準備室から新展示館への機械類の移動作業を始め、四月二十日現在その約九十数パーセントを終らせている。

新展示館内には、正面玄関を入り、すぐ右手をみると復元された植原鉄工所が独立して設置され、その後部区域に季節展示品コーナー、および電気・建築関係の展示スペースを予定している。

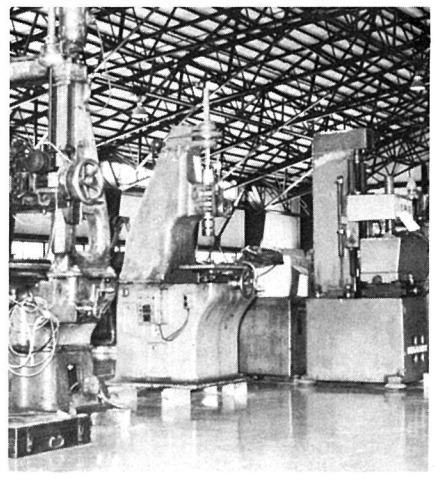
電気・建築関係の展示品も収集されたものが搬入されている。

また、左側をみると、窓側に手前から明治期の木製旋盤を最初に大正期、昭和期の年代順に並べられた旋盤が設置されていて、左側のみみて突当り迄行き、突当ったなら一列ずらして、また左側のみみて戻ってくると旋盤による技術変遷が誰にでも理解できるよう配置してある。

旋盤と相対する側には、相対する旋盤と同時代のフライス盤、自動盤、タレット旋盤などが年代順に配置されている。配置された機械類は百十数点に及んでいる。（この他に倉庫に眠る機械類約五十点）

四月二十日現在は移設をほぼ終えたという段階であるので、これからは動態保存するに必要な諸作業にとりかかっている。

（機械工学科助教授）



展示室の内部

研究室では ㉚

プラズマ物理研究室

無数の電子とイオンが集団をなし電気的に中性の電離気体をプラズマという。プラズマの研究が盛んになったのは戦後まもなくのことである。この頃のプラズマ研究は、制御された熱核融合を実現するための研究とほぼ同意義であった。水素爆弾が爆発的な瞬時の水素核融合であるのに対して、制御熱核融合は熱運動でとびまわる高温（数億度）のイオン同士の衝突による緩やかな核融合を目ざしたものである。

「熱核融合は、核分裂に伴う死の灰の問題は無く、クリーンであり、燃料の重水素は海水から幾らでも採れる。熱核融合が制御されさえすれば人類のエネルギーは永遠に保証される」というようなことがよく言われた。しかし、少し研究が進んでくると、これは必ずしも正しくないことが分ってきた。

熱核融合のための条件が一番ゆるい燃料はトリチウム（三重水素）であり、これは天然には存在しない。地球上に比較的少ないリチウム元素に中性子をぶつけてつくる。こうして出来る三重水素は、化学的には水素と同じ性質をもっているので水の中にまぎれ込み、人体に非常に有害である。これとは別に放射能の問題も有り、クリーンというイメージからははるかに遠いものとなった。

二十年前に〝二十年後に実現する〟はずであった制御熱核融合は、現在また二十年後と言われている。そして今では、熱核融合の研究は炉工学の研究が主流となり巨大科学へと変貌し、従来のプラズマ研究とはほとんど別の分野になってしまった。

前おきが長くなってしまったが、当研究室は低温（数万度）のプラズマを研究の対象にしている。

このプラズマ中を伝播するイオン音波ソリトンと呼ばれる粒子的なふるまいをする非線形波を研究している。これは塚林研究室との共同研究である。塚林助教授の実験的研究を中心に、学会や国際会議での発表などを通して内外で高い評価を得ている。ソリトンについては、このシリーズの㉕で話しがあったので、イオン音波について紹介しよう。

プラズマを成すイオンの質量は電子のそれの数千倍である。このことがイオン音波という名にもかかわらず、この波の速度はイオンの質量と電子の温度で決まるという奇妙なことをおこす。

プラズマでは電子温度がイオン温度より高いのが普通である。これは電子がイオンに比べてはるかに身軽にとびまわることが出来るからである。イオン音波は名前が示すように空気中の音波と同様、プラズマの疎密波である。イオンは質量が大きいのでゆっくり振動する。身軽な電子はイオンにくっついて、ほとんど一緒に振動する。しかし、速度の式の中では、電子質量はイオン質量に比べて無視され、イオン温度は電子温度に比べて非常に小さい場合が多く、これも無視される。これが前記の奇妙さの原因である。

振幅の大きなイオン音波はソリトンに成長し、イオン音波ソリトンと呼ばれる。現在研究中の実験では、ソリトンの内部と外部（バックグランド）のプラズマの温度と密度を測定し、更にそれらの差からソリトンそのものを形成しているプラズマの温度や密度を決定することを試みている。これには、パソコンによる計測と数値処理が不可欠となっている。

また二方、非線形微分方程式にもとずく計算機シミュレーションが行われ、実験結果を説明する結果を一部得た。更に、プラズマの輸送係数の解析的な研究が行われている。

（教授・柳下　崇）

昨年は円高不況の波

就職戦線に変化あり

今年は新たな就職協定

まず、六十一年の就職概況から報告しよう。

求人件数は、前年度より微増で、四千五百十八件。東京周辺の地価高騰によって、活況の兆しがみえてきた建設業からの求人が増えたのが大きな特徴。情報処理産業からの求人意欲も根強いものがあった。相変わらず東京を中心に求人が集中している。

円高不況が漸次浸透してきたせいか、六十一年度前半は製造業、非製造業を問わず、求人活動が活発にみえたが、後半になると、建設業を除いては、尻すぼみの状態。

学生の方も、早めに企業研究をし、積極的に工場見学や情報収集に動いた学生は、順調に内定していったが、そうでなかった学生は、内定にこぎつけるまでに、かなりの時間を費やしたようだ。

最近、とくに目立つのが、「自宅通勤」志向だ。自宅からの通勤圏に自分の希望する企業があればそれにこしたことはないが、なければ早めの切り替えが肝心。

一昨年の秋以降、円高傾向が進み、国内に不況感が漂っている。対米貿易黒字に端を発する円高・ドル安は、輸出型産業やその関連産業に大きな打撃を与えていることは周知の事実。企業は思い切ったコストダウンを図り、生産拠点を海外にシフトしたり、人員削減にふみきったりして、緊急の対応に迫られている。円高基調がこのまま続くとすれば、当然、雇用にまで影響を及ぼしてこよう。六十二年度の就職戦線は、例年にない厳しい状況が予想される。

新卒採用を見送る企業も出てくるだろうし、採用をする場合でも、少数精鋭の厳選体制で臨んでくることは必至。

求職側である学生も、「就職なんかなんとかなるさ」の気持ちを捨て、「自分でなんとかする」方向に頭を切り替えて、集中して就職問題に取り組むべきだ。

自分の能力や適性を見極めることはむずかしいにしても、それなりにつかんでおいたほうがよい。でなければ、自分がやりたいと思う仕事も発見できないだろう。活字離れのみられる昨今、難儀な作業だろうが、毎日、経済系・工業系の新聞には目を通そう。その紙面から経済のこと、産業界の動向などが、ある程度つかめよう。就職問題を考えるときに、重要な〝参考資料〟となるはずだ。

筆記試験を課す会社を受験しようとするならば、専門のほかに、英語や作文の能力が問われることが多い。日頃の学習、訓練がものをいおう。

その会社に入社したいなら、やるしかない。

就職を「なんとかする」するためには、主体性をもって努力したい。他人からいわれたからとかで、従順にその意見を受け入れて、決めてしまうのも考えもの。就職は他人の将来のことではなく、自分自身の将来のことなのだから。他人に相談したり、他人の意見を聞くことは大いに結構なことだが、最終的な決断はやはり本人がすべきだろう。

ところで、新年度の就職協定が決まった。八月二十日企業説明会開始、九月五日個別訪問開始、十月十五日採用内定開始である。実際の選考は九月五日から、ということを基本的に認識しておこう。ただ、昨年の例でもわかるように、協定に準じない企業もあるので、注意を要する。

（就職指導室）

これからの行事予定

【5月】
17日　後援会総会
21日　学生総会（午後休講）
29日　体育祭（休講）

【6月】
29日　創立記念日（80周年記念式典）

【7月】
11日　休講
13日～24日　前期末試験
25日　補講
25日～9月17日　夏期休暇
27日～31日　教職科目集中講義

【8月】
2日～27日　カナダ短期留学
22日～9月9日　ヨーロッパ研修

【9月】
18日　後期授業開始

【10月】
5日～8日　履修申告
30日～31日　休講

【11月】
1日～3日　大学祭
2日・4日　休講
19日　学生総会（午後休講）

【12月】
21日～25日　スキー教室
21日～1月9日　冬期休暇

【1月】
11日　授業開始
25日～2月5日　後期末試験

【3月】
20日　卒業証書・学位記授与式

読書

学長　三浦靱郎

読書は私の食事であった。こどものくに、日本少年に始まって、有明堂文庫、日本文学全集、世界文学全集、岩波文庫、岩波新書と、片端から食べ漁った。

一個人の経験できる範囲はきわめて限られているから、本を読むことで自分の世界を広くしてきた。何事にもさまざまな考え方、見方があるから、ほかの人の書いたものを読むことで、自分の世界を深めてきた。

いま私の書架には、七十年近く読んできた本が並んでいる。このほかに、これから暇ができたら読んでみようと買い集めた本もある。

ところが、数年前から視力が弱ってきた。だんだんひどくなって、この一、二年はほとんど本を読んでいない。度の強い拡大鏡を使えば読めないことはないが、読むことに気を取られて、読んだものについて十分考えることができない。

そこで今は、読むことは必要最少限にとどめて、書くことに専念している。自分の心を本と考えて、長年そこに集積してきたものを読んで、字にしているのである。

心の中は、自分のものでありながら、意外に読み方がむずかしい。驚くような発見をして喜ぶこともあれば、見なければよかったと後悔することもある。

これが、これからの私の課題の一つである。

アメリカでの一年間の海外研修を終えて

玉木保

はじめに

昭和六十一年四月より一年間米国コネチカット州ニューヘブン市に在るエール大学医学部整形外科バイオメカニクス研究室（M・M・パンジャビ教授主宰）に客員助教授として滞在し、脊柱の力学構造についての研究を行って来た。妻そして当時四才の長男と六ヵ月の次男も連れてニューヨークはJFK（ジョン F．ケネディー）空港に降り立った。ニューヘブン市はここから二時間リムジンバスに乗って海岸沿いに東北に進んだ所である。古ぼけた二〇人乗り程度のバスは夕暮れのインターステート（高速道路）九五号線を猛スピードで走った。窓から見る風景は予想どおり「荒削りのアメリカ」である。これが二度目のアメリカであるが、日本は清潔な国だと改めて感じる。しかし広い国土であれば掃除も大変だろうと思ったりもする。

ところでニューヘブン市は人口一二万人、グレーター・ニューヘブンと言ってニューヘブンを中心とする生活圏の人口七〇万人でアメリカでは中位の都市である。ニューヨークとボストンの間に在りニューヨーク迄一二〇キロメートル、ボストン迄二五〇キロメートル位で、文化的にはボストンを中心とするニューイングランド地方に属するがニューヨークの影響も強い様である。

アメリカでの一年

一年間の主だった出来事は旅行と長男の通学である。家族旅行は計三度行いアメリカの広さを実感した。

八月の始めには一〇日間の予定で初めての長距離ドライブをし、海岸のリゾート地コッド岬及びボストンを廻った。

一〇月末からはパンジャビ教授が日本に出張の為この間にカナダ（モントリオール、トロント、ナイアガラの滝）、ワシントン D・C・計三〇〇〇キロをドライブした。

一月末には学会参加を兼ねてサン・フランシスコに一〇日間滞在した。日系人の多いこの街ではくつろぐ事が出来た。

長男の通学は子供の社会や初等教育に就いて知ることが出来、より深くアメリカを理解する為の助けになったと思われる。

長男は七月から一ヵ月間、ホリデーヒル・デーキャンプと言うサマーキャンプに入った。本人にとっては英語が分からず心理的にきつかったようである。又九月からはウォーシントン・フッカースクールと言う市立小学校のキンダーガーテン（幼稚園）のクラスに入り三月迄通学した。帰国の時点ではある程度会話も出来るようになりアメリカ人の子供たちとも遊べるようになった。

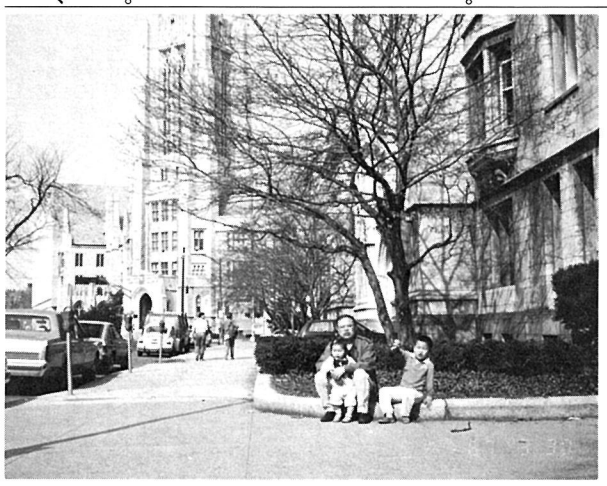
アメリカ文化

研究室のアメリカ人にアメリカの代表的な料理は何だと聞いたら、「ハンバーグとステーキ」との事であった。日本料理の様に形や色を楽しむと言った贅沢さは無く、単にお腹を一杯にすれば良いと言った感じで、食文化は貧しいのではないかと思った。しかしニューヘブンはアメリカンピザの発祥地とも言われピザ屋が沢山あり、一〇ドル出してオニオンとベーコン入りのラージ・ピザを注文すれば四人分は有り栄養満点、いや栄養過多と言っても良い位である。

さてアメリカ人の楽しみは何かという事であるが、これはパーティーとドライブであろう。人間関係を大切にし、友人の多さがその人の人間的豊かさを表わすかの様で、その為に事ある毎にパーティーを開くと言うことではないだろうか。そしてその席で初対面のゲスト同士が新しい友達を造るのである。私も何度か招待されたが、此の様な時には言葉のハンディーを思い知らされる。しかしリラックスした雰囲気は大変楽しいものであった。

またドライブは安いガソリン（一リットルが約四〇円）と基本的に無料の高速道路に支えられ、広大なアメリカ大陸を自由に移動するのである。音楽会や観劇も日本に比べれば遙かに庶民の楽しみとして定着しているが、ドライブは全ての人に共通したものである。土、日が完全に休みと言うこともあり郊外には設備の良いモーテル（一部屋、四〇ドルから六〇ドル）が沢山あり、各地の催し物や博物館等を訪ねて休日を楽しんでいる。

日本と比較してアメリカ文化の優れていると感じた点は、ファースト・ネームの社会、言い換えればフレンドリーと言うことが高い価値を持っている社会であると言う事である。パンジャビ教授から「夫婦も含めてお互いファースト・ネームで呼ぼう」と言われたが、これは親しみと信頼を表わす表現であり、大変嬉しく感じた。しかし同僚や自動車修理工場の担当者を、ボブとかデイビッドと呼ぶのは抵抗が無いが教授夫妻をマノハー、エリザベスと呼ぶのは気遅れがして結局殆ど言えなかった。異民族、異文化に生きる人々が上手に付き合う為にはファースト・ネームの付き合いが最も便利な道なのではないだろうか。九月からは夜、市の成人学級の英会話のクラスに通ったが、ベトナム、フィリッピン、香港、ポーランド、ソ連等からの難民や移住者がゼロからスタートして二、三年で一応の暮らしを立てている現実を見ると、アメリカ社会の許容性の高さに感心する。しかしこれは又犯罪をも許容しており、大学周辺でも月三〇件のパーソナルクライム（人身犯罪、主として、脅しやひったくりだと思われる）が発生している。こうした環境に慣れていない私達には落着かない毎日であった事も事実である。



エール大学を背にして

教育

エール大学は学部をカレッヂ、大学院をスクールと呼んでいる。カレッヂ（一学年の学生数一二〇〇名で本学より少し多い程度である）は基本的に全寮制で生活の基本が寮に有る。学生は一二の寮（これをレジデンシャルカレッヂと呼ぶ）のどれかに所属し、各寮でサマーセミナーや各種の研究会を開いている。年間二期制（秋期、八月二七日から十二月二二日、春期、一月九日から五月二五日）で、計八期あり、その間に自分の希望する単位を取り、卒業時にはメジャー（専攻）を決めて、その分野に関しては少し多く勉強する様に成っている。メジャーは文学、経営、法律、音楽、演劇、工学（化学、電気、基礎、機械）など全学問分野にわたり計七〇程あり、これを一二〇〇名で選ぶ訳で各専攻一〇から三〇名程度となり、大変木目の細かい教育を行っている事に驚かされる。スクールは医学、工学、文学、法律等一二有り、研究を中心に大学院生の教育も行い、独自の運営が為されている。

此のような密度の濃い教育は日本では見ることが出来ないのではないだろうか。アメリカの学生がよく勉強すると言われるが、これは以上のような大学側の積極的な姿勢に呼応するものである。高校までの自由で伸び伸びとした教育を基礎に各人の創意に依拠したカレッヂ教育を積み上げるというアメリカの教育制度は日本より遙かに進んでいると感じた。

研究

私の所属したバイオメカニックス研究室の構成はパンジャビ教授、エンジニアー一人、テクニッシャン一人、機械工学専攻のドクターコースの学生一人、そして私である。此の他に不定期にスイスから整形外科医師が研究に来ていた。パンジャビ教授は脊柱のバイオメカニックスに関しては世界的権威であるが研究室の構成はこの様に小さく大変アットホームであった。教授夫婦は二度の来日経験があり、研究室に滞在した日本人も私で四人目であり、日本人には好印象を持っておられた。また日本料理は刺身、寿司、てんぷらと何でも好きで、公私共に安心して生活することができた。

研究の内容は脊柱の動きの解析で今まで懸案となっていた研究室の実験結果の不明確な部分を私の提案したモデルで解決することができ、充実した研究室滞在であった。

研究室の内外で感じたアメリカ流の研究の特徴は人の流動が大変激しいと言うことである。ポスト・ドクと言うドクターの学位を取った人が三〇代半ば迄、一年契約（年俸一万五〇〇〇ドル位、二三〇万円）で働いており、これらの人は全米の業績の上がっている研究室へ向けて絶えず移動している。従って一研究室内でも一年間に二、三人が辞めて又新たに採用される。とにかく流動的で、研究室に来てみて面白くないとなるとすぐに次のポストにアプライしてアメリカ全土を移動しており、日本と比べると短期決戦的な色彩が強く大変ブィブィドである。しかし問題も有るようで、給料が安いので共働きとなり奥さんの職場の都合もあるので、移動となると家庭内のトラブルも多発し易い。

しかしこの人の流動性が研究推進の大きな活力源の様に思われる。

おわりに

生活習慣の違いと言葉のハンディーと言う二重の障害で心理的には相当のプレッシャーであった。一年間生活してやっと習慣については大雑把に理解できたと思うが、言葉については余り上達せず、歯がゆい毎日であった。二年程度滞在すれば一年目で生活に慣れ二年目で言葉にも慣れて来る様である。一年間は大変短く、夏休みを過ぎると帰国の事がいつも念頭にあり気ぜわしく過ごしてしまった。

本学から支給された出張手当と給料を元に生活した訳で一ドル＝一六〇円は大変ラッキーであった。住宅や保険（医療費）は高目であるが、日本より安いものも沢山有り、ここ数日間の一ドル＝一四〇円となれば物価は殆ど同じだと思われる。この円高は国際交流、厳密には日本人の海外滞在、推進の為には最高の援軍である。学内に於ても多くの方が体験される事を期待する。

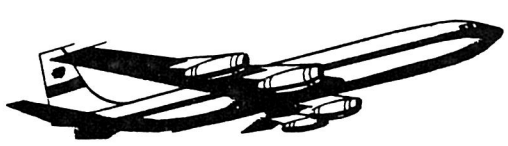
（機械工学科教授）

桑原助教授　長期海外研修

建築学科の桑原文夫助教授は、去る四月十日、オーストラリアに向けて成田をたった。同助教授は、シドニー大学にて、来年三月までの一年間、杭基礎に関する研究を進める。

昭和61年度　学外研修等一覧

☆玉木保「背柱の力学的構造の実験的研究」（4／1～62年3／31 アメリカ）
☆柳沢章「西ドイツ、ハノーバーメッセに出品、発表」（4／5～5／2 西ドイツ、イギリス）
☆伊藤庸一「上海周辺の居住空間に関する調査」（4／26～5／6 中国）
☆石川豊「電気化学協会国際会議での発表」（5／3～5／9 アメリカ）
☆塚林功「IEEEプラズマ国際会議での発表」（5／17～5／25 カナダ）
☆大川陽康、村川正夫、宮沢肇「NAMRC国際会議での発表」（5／25～6／5 アメリカ）
☆松木正勝「ASME国際ガスタービン会議に出席」（6／7～6／22 西ドイツ、フランス、イギリス）
☆村上尚司「ハイテクセラミック国際会議での発表」（6／20～6／30 イタリア）
☆町山忠弘「風力エネルギー等シンポジウム、セミナーに出席」（6／21～6／28 西ドイツ、オランダ）
☆小倉勝「UBCにおけるEXPO86試作車競技会に参加」（7／8～7／25 カナダ）
☆鈴木寛次、藤田則夫「カナダ短期留学の引率」（8／3～8／28 カナダ、アメリカ合衆国）
☆吉田清「カナダ短期留学に参加」（8／3～8／28 カナダ、アメリカ合衆国）
☆水野担「ブラジル日系人調査指導、ILOTSに出席」（8／9～9／13 ブラジル、アメリカ）
☆轡田昇「ノンインパクトプリンティング国際会議に出席」（8／23～8／31 アメリカ）
☆鈴木敏正「超格子国際会議での発表」（8／15～8／23 スウェーデン）
☆鈴木敏正「分子線エピタキシー国際会議に出席」（9／2～9／14 イギリス、フランス）
☆宮坂修吉「中国における都市住宅の実地調査」（7／25～7／30 中国）
☆城戸卓男、谷本善彦「ヨーロッパ研修の引率」（8／21～9／11 ヨッロッパ各地）
☆渋谷龍美「ヨーロッパ研修の実地調査」（8／21～9／11 ヨーロッパ各地）
☆大川陽康、松木正勝、岩瀬勝、鈴木昭正「華中工学院との学術交流」（10／26～11／9 中国）
☆吉岡丹「華中工学院との学術交流」（10／26～11／8 中国）
☆轡田昇「写真画像の国際シンポジウムに出席」（11／2～11／9 タイ）
☆福田成二「アメリカ都市再開発の事例研究」（10／13～10／24 アメリカ）
☆町山忠弘「ASME ウィンターミーティング」（12／7～12／14 アメリカ）
☆町山忠弘「風力エネルギ利用技術シンポジウムに出席」（12／27～62年1／6 西ドイツ、イタリア）
☆村上尚司「SAE国際会議でのプラズマ溶射によるセラミックコーティングの研究発表」（62年2／22～3／6 アメリカ）
☆伊藤庸一「インドの風土と居住空間に関する研修」（62年3／7～3／15 インド）
☆水野担「ブラジル日本人実態調査の企画、準備、指導」（62年3／6～3／31 ブラジル）
☆寺島幸雄「熱工学、ソーラーエネルギ国際会議での論文発表」（62年3／21～3／29 アメリカ）
☆北後寿「建築物基礎、地盤調査」（62年3／11～3／15 タイ、シンガポール）



インド訪問記

伊藤庸一

デリーから

成田を発ったのが三月七日午後三時五十五分、それからもう十三時間、デリー到着予定時刻をとうにすぎたと言うのにまだバンコックである。時間のあてにならないインドと覚悟はしていたものの、国際線がこれでは不安がよぎる。先刻のビールの件もそうだ。食前に頼んだ時は、サリーをまとったスチュワーデス、「はい、直ちに」と返事はいいが一向にこない。機内食を前に催促すると、「少しお待ちを」、半分ぐらい食べてもう一度催促すると、「あと五分」。結局ビールを手にしたのは、機内食がかたづけ終わってしばらくしてからである。

彼等、彼女等にとって、時間は地球の自転ではなく、彼等、彼女等の自転で決っているのではとさえ思えてくる。

苦いビールを飲みながら地図を見る。今頃はベンガル湾の上空であろうか。ベンガルと言えば……、弁柄とも、紅殻とも呼ばれる、京都を中心に近畿から北陸にかけての、由緒ある民家に良く用いられるやや赤味がかった塗料の語源であることをふっと思い出す。科学的には酸化第二鉄を主成分とする、湿気と冷気に強い防腐塗料にすぎないのだが、特に土壁に混入されると、沈んだ色調ながら、どことなくエキゾチックで、妙になまめかしく感じられる顔料である。

弥生時代の稲も、奈良時代の仏教も、辿ればインドであり、紅殻がすぐれた顔料として、同じくインドから渡来したとしても何の不思議もない、ひとつじっくり確かめて見よう、そんなことを考えめぐらせているうちに、ようやくデリー国際空港に着いた。

デリーからアグラ、ジャイプールと進むにつれ、異文化の緊張もほぐれ、目が落着いてくる。そんな時、大地も、建物も、そして人までも、同じ色調であることに気付いた。大地を練りあげたレンガ、あるいは岩山から切りだされた石板で作られるインドの建築は、ピンクシティとして紹介されるジャイプールの風の宮殿のややサーモンピンクに、ムガル帝国の強大な力を誇示するファテプールシクリやアクバル廟のややワインレッドに、ジプシーの家のややオレンジイエローに近いなど、色調に幅はあるものの、どれをとっても紅柄を連想させるのである。

仏教を生み出し、イスラムの強い影響を受けながらも、生れながらの、否、生まれる前から死んだあとまで続くカーストに何の疑念も抱かず悠久に生きられるのは、インドの大地の持つ魔力であろう。そして、紅殻は大地の色、不思議な魔力をもつ色なのであろう。

ピンクシティ（ジャイプールの町）

ボンベイへ

旅の最終地、ボンベイ国際空港を降りたのは、三月十四日午後六時、珍しく時間通りである。あまりにも時間通りだったせいか、迎えの車が見あたらない。一時が万事、こんな調子だがそれにもずいぶん慣れた。一時間ほど待ち、迎えの車に乗りこんで直に日が落ちる。電力事情の良く無いこの国にあっては外灯も弱々しく、あたりはすぐに暗闇である。まさか車のライトは電力に関係なかろうが、どの車もスモールライトしかつけない。暗い中をヘッドライトをチカチカさせ、クラクションを鳴らしながら、猛スピードで進む。この国では交通ルールなぞクソクラエ、生れながらにして強い者が強く、速い者が速いのである。

信号に停ると、さっと少年が近付く。花で作ったレイのようなものを見せ、某ルピーとどなる。夜目では白い実がとてもきれいに映る。どうせまやかしであろう、ナヒーンと横を向く。少しでもあいまいな態度を見せると、買うまで手を換え品を換え言い寄り、動こうとしないが、はっきり駄目とわかると別の車めがけて走って行く。彼等のためにも、イエス・ノーははっきりした方が良い。

次の信号ではボロ布を持った少年がかけ寄り、勝手にフロントガラスを拭き始める。運転手がやめろとどなっても、終始ニコニコと一向に手を休めない。ドアからリヤウインドーと一回り、信号が変るまで拭き続ける。最後にもう一度ニコリ、運転手も慣れたものでコインを手渡し、走りだす。車が汚れていたわけではない、恐らく、持てる者が持てない者へ施すためのセレモニーなのであろう。

まもなくアラビア海に沿う道路に出る。道路際にチラチラ火が見えるので目を凝らすと、どうやら道路で夕食の仕度のようだ。何と道路で！暗闇に目が慣れるに従い、延々と続くボロのテントとおびただしい人の群が見えてくる。夕食の火は、家のない彼等の、政治からも、経済からも、歴史的にドロップアウトさせられた人々の、頼り無げではあるが限り無い存在の主張に見えてくる。

そう言えば車めがけて走り寄る少年、ビィレッジの痩せた婦人、外人相手の物売りや乞食、どの顔もその社会的な位置づけと裏腹に、底抜けに明るさがある。道路で飯を食らい、道路で糞をたれ、道路で赤子に乳を飲ませ、堂々と貧に生きるしたたかさ。彼等にとっては、歴史も社会も為政者の作りだした虚像の世界に過ぎないのであろう。

と言うより、彼等の今生きている現実こそが彼等の世界の全てであり、それが紅殻のごとく、一つの大地を共有し、それぞれの色を展開しているのである。

ポストモダンも結構、国際居住年も結構。しかし、それが我々だけのひ弱なデザイン、一人よがりの論理であるならば、我々はますます彼等の世界から遠ざかってしまおう。ではどんなデザイン、どんな論理が彼等に通用するのだろうか？ビールのにがさが頭の中までしみわたる。夜も更けた、答はゆっくり出そう。

（建築学科助教授）

土着の民家

募集

第4回 日本工業大学
カナダ短期留学（語学研修）

期間	62年8月2日～8月27日〈26日間〉
費用	545,000円（30人の場合）
研修先	ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）の語学研究所（カナダ・バンクーバー市）
プログラム	月～金曜日　午前中3時間教室で授業、午後は週1回フィールドトリップがある。
カリキュラム	①聞いて理解する力②単語と熟語③英会話④バンクーバー市内での英語の実践的な活用
宿舎	ホームスティ（バンクーバー市在住のカナダ人の家庭に滞在し、その家族の一員として生活する。）
その他	UBCでの語学研修終了後、アメリカのサンフランシスコとロサンゼルスへ渡り、研修成果を実践する。オプショナル・ツアーもある。
窓口	教務課

第15回 日本工業大学
ヨーロッパ研修

期間	62年8月22日～9月9日　〈19日間〉
費用	548,000円
行き先	バルセロナ→ローマ→ウィーン→ミュンヘン→ハイデルベルク→チューリッヒ→ジュネーブ→パリ→ロンドン
窓口	学生課